

文章ノートを創ろう

お気に入りの文章を書き写す。あるいは要約する。
それを長年継続することで、あなたの文章力は大いに深まります。
今回は、自分だけの文章ノートをつくって、書き写したり、要約することの利点について、ご自身の経験を踏まえながら、辰濃先生にご紹介いただきました。

文章力を深める一つの方法は、自分が『いい』と思った文章を丁寧に書き写すことだ。そのためにも、自分だけの「文章ノート」を創ったほうがいい。

好きな作家の作品で、心を動かされる文章があれば書き写す。新聞や雑誌で「いいぞ、これは」という文章に出会えば、これも書き写す。出所を書き、できれば自分の感想を書き加えておく。五年、十年とノートを続ければ、これはあなたの貴重な財産になる。

面倒なことのようにだが、なに、明治維新当時の若者ならばそんなことはオチャノコサイサイだった。仲間がオランダ語の原書を借りてくると、手分けして一冊まるごと書き写し、何冊も複製を創ったものだと言福沢諭吉は書いている。

文章の勉強をしている仲間に、朝日新聞連載中の川上弘美作『七夜物語』を毎日書き写す女性がいた。連載が終わった時、ノートは十七冊にもなっていたそう、そのねばり強さは表彰ものだ。

書き写すことで、私たちは、文章の流れ、文章のリズムがいかに大切かということを知り、その作品を書く時の作者の息づ

かみや気合を身近に感じることができ。気に入った情景描写の部分を一字一字書き写せば、その文章がなまなましく記憶に留まるという利点もある。

逆に「いいな」と思って書き写し始めたのに、途中でやめたくなる文章もある。一見よさそうに見えても、心の伴わぬ文章は書き写しているうちに上塗りのウルシがはがれてしまうのだ。

話は変わるが、四十代の現役のころ、毎日、その日の主な記事の要約をし、要約の一覧表を新聞の第一面に載せるという地味な仕事を続けたことがあった。長い記事を百字、百五十字に要約するのはしんどい仕事だったが、得るところは大きかった。

うまく要約することのできない新聞記事は結局はどこかに欠陥がある、ということもわかった。記事を短く要約する仕事は、自分の中の「まとめ力（要約力）」を身につける格好の訓練の場だったといまは思う。

朝日新聞の『天声人語』、毎日新聞の『余碌』、あるいは、自分の読んでいる新聞の中の特定の記事、社説、声欄の文章

などを切り取って自分の「文章ノート」に張りつける(あるいは書き写す)。その上で、その文章の「要約」を付け加えておく。

要約の時数は百字でもいいし、二百字でもいい。それを一年間続ければ、あなたの「まとめ力」は格段によくはなるはずだ。その能力は、文章を書くときに役立つだけではなく、自分の計画や読んだ本の内容を人に伝えようとする時にも役立つし、企業人になって依頼書、企画書、報告書を書く時にもおおいに役立つ。

A4十枚にぎっしり書かれた企画書を敬遠する人も、A4一枚にまとめられた簡潔で刺激的な要約があれば、進んで読んでくれる。

●たつの・かずお
朝日新聞社入社。ニューヨーク支局長、東京本社社会部次長、編集委員を経て、論説委員。「天声人語」を13年間にわたり執筆。平成6年朝日カルチャーセンター社長を経て、現在著述業。

